

冊	番號	部門
五	一四	三

近江輿地志畧

十五

日	吉
星	吉
月	吉
年	吉
日	吉

近古輿地志略卷之六十一  
蒲生郡第七

武佐村 席所内村のあおり中山の旅宿也和氣村  
必佐の郷の名と氣うる此の名前は古今の書物小  
説原流の後蘇峰の記めに此の名の文ふれども竟考  
たれりかと武佐の名を讀てその名と氣を過信するく  
月とかふれぬふうきと川の山はあれのよきからん  
津多院 武佐村の傍らある古津多院のまする  
長光寺村 武佐村のああ下河村つるせ也長光寺村と  
名づけられん

法性寺  
長光寺

即長光寺村山口也。其後有二公生焉。其一曰長川禪。

艸創廢産皇子の達ニ也経記署之至徳有ある事無事少未  
可ちるの婦人高階端座於坐て其惣り左の手口油未も  
佛名生する事有ゆかし油身万淨也潔齋ノく清淨名を  
為す。左の手口油未也嘉祥ノ如度也。君主小力と佛法  
より也精舍を無事ノ釋迦坐す。又佛は  
御坐す日威力を示セ。亥年小金色の光輝忍ノ嘉祥  
后の日中入則白矣。とせう。未嘗四方から董ム。照應有く  
國門揚起。先釋氏佛を寫シ。且門縫毎往見テ。小

雪を踏み、まことに霜月の序の山林へ方々へ進む。石及び  
喬木のあらしきを以て國へ贈る之を至る小名をも。曰はる  
瑪瑙石也。善能山也。白金石也。金剛石也。あつ  
くも石也。亦ハ白檀樹也。共ハ修圓小圓也。さうのふりもん  
陳小白檀を以佛寺造。而下不器皿等。歸人左京寺  
免西川禪院。而くと圓は藍を石間に造。して西門禪  
院也。妙法院也。是れ無廢法無元也。一五年二月  
十八日。左の后。左の手。小馬。自。精舍の事とす。金  
臺及後院。傍院。等と。臺車。被。同。禪を以て踏。馬。等の事  
を。想。音の像を。遙。彼。宝。石の上。不。易。手。色。化。等。の事。

孝子と名づけられた。先高祖天皇既而うる運ともう者なし  
則此長老寺の地ふ薦めよすとぞ長老寺は源氏のち地  
也とくらべて御記一毫もゆふ先祖源氏の事とあく  
しきせても其事は源氏の事とひれん甚く源氏の  
事を記す。更に清機小善寺御年月中ゆも南朝の事と  
きを記す。右是が御記と相間一毫ふ全不贅め御記一  
毫も御想像するべくトゞ其中佛小法事元世の年号  
不考也。ちやの年の年号、考佐天皇の大化白雉壬辰と後世明  
天智の永五年をあきらか。凡十七年天武天皇白鳳癸酉  
の後持統天皇丙午年をあきらか。十年癸未天皇元年丁酉

年少より其の才を知り、五年後は既にその才を盡して大變と号  
ひ自是以後、身を相続する絕筆は未だ元也のひまわる  
を乞ふ事無也。古人多が佐景と云ふは武名ゆけり。亦半縁  
仙子かの精舍も仰ぎし日う秦墟うかつて今終乎一山雲  
をなすりみどりをあせ已往の鵝石子今ゆ寺傍え  
自天降ある物也。甚ちカ一人清閑廻ニ戸隠青色の石  
を喜んで玄衡生を捕まく馬國の里を立て長光寺を參り  
てゆきの即ち中尊酒ノモレは寺門邊う象創上主王  
の蓮也。千人方熱敷の帝位の精舍及ぶ名確漢の寺院と  
しくは元和院の色画ふ瑜伽接達の音清々中御寺僧少観

をとて、トウセイ、桂小正三在行た邊關、壇中將平名に、主を御と  
立ちあらまし、る今、の世すとも甚、遠く、あらきく左手に天  
正、わ曰、御將軍ハ、御名、目、御外王、迎に國風、を主上追武  
海、之御、佐、草テ、に、勅、長、先、す、あら、手、手、文和二年五月、士吉  
御、家、修、す、旅、主、上、弘、子、に、勅、御、佐、守、毛利、朝、天、季、す、太、育  
二年四月、内、得、脅、代、皇、化、奉、代、慶、元、文和三年五月、昌、吉、後、光  
泰、帝、船、を、江、州、御、佐、守、

長、先、を、山、石、場、址、　長、先、寺、社、人、在、此、の、よ、より、先、龜、寺  
庚、年、五、月、督、信、長、殿、と、勅、御、佐、守、も、す、か、葉、御、傍、も、と  
そ、と、先、寺、と、御、寺、と、し、と、湯、多、の、泡、ふ、う、く、

御、田、村、　長、先、寺、社、而、御、寺、

金、田、衣、

金、割、守、村、　金、割、守、ハ、六、角、佐、守、黒、川、瀧、也、以、始、古  
芳、寺、は、つ、く、ナ、か、一、キ、モ、行、さ、む、シ、寺、ま、御、御、寺、

基、田、村、　御、田、村、の、あ、ゆ、

力、里、村、　長、の、村、を、有、あ、ゆ、力、里、之、序、を、有、あ、ゆ、の、第、  
の、領、主、也、く、集、ふ、を、休、則、豫、御、り、あ、山、川、多、御、也、也、の、第、  
あ、御、公、づ、く、水、原、ち、本、カ、村、力、里、御、御、國、山、谷、主、ら、い、序  
義、あ、れ、邊、關、有、く、及、小、男、山、御、御、の、ゆ、小、福、人、  
中、せ、ト、も、西、馬、は、萬、色、父、名、御、寺、の、事、ふ、り、一、族、泰、正、國、東

上野宣政系糸引く属一也改入回記ゆむ九里勝元加州の  
山田記ふ也

松森村 岩村山西山

彦劍村 松森村のあみ

栗錦村 彦劍村のあみ

上田村 栗錦村のあみ

西高村 上田村東北山中  
山のうち也 ○猿田郷

馬園村 内浦馬淵西村の櫻井村岩見村島崎村

を云島證ふねばの別名とも云也と俗相傳天武天皇大

友皇子と爲ひ方と馬も馬鹿方とは云ふあるへ一つの  
浦山鶴鳥よん鶴力使ひたす天皇多小退支を得て繁  
げ地と馬淵のなまうらと云

夫木集八女郡山崎山與之を相

日もより海せちて浦しもさくへりやせらるる

西村 西高の東山中

高先子 馬園村より海を云海老院のままで  
あ村長門を高教院 今のおを乞地也と云雄波鬼丸

大夏室高年白布村高門守市高は周自秀次の大元布村  
高陰久る也秀次公生害の約布村高陰不口等守ゆく

切腹へ子將志摩院又、妻を取るも駆逐馬淵ひやう  
陣とあ。源平争ひんに勧め大守を有す相國御婦秀次も行  
馬のあら也。志摩院又は四へを即ち威のゆく人の元より  
ゆくらを私利せらる事あるのみ。まよ波城を馬  
の通言疊十絆のうちか十数年の間修練とほんほふ  
義勝へ七万石金城より配給中の下高天王の元にて絆ひ十  
九歳より相続へ井伊柳部頼山姓長嗣は承うく  
高清祐小佐と本家相馬郷とあらか。佑之承る所のあ  
義治國を名い後多びの御小名も。其後東郷空谷ゆく  
而把ひ義治のみ定治院御の方在ふ。是れは近畿國の

らしく志摩を義勝とす。且高天王の名で祭る  
はね(未だ産セ)ナリナリ  
め氣す。馬淵より法華家昌と山崎義持とす。人曰  
上人の同母也。

の傍。供材。馬淵の中央つみ材也。伝云惟高復正とひゆふ  
斎の供供養をあせり。なまくとて或云佐連為正。みぶの傍  
傳書をあらむ也。或云至施上人はゆく。も傳書をあ  
ひなの名をと云。

曼多羅の跡。も傳傳けの西へまく。相傳古昔古御  
藍やまち祥院跡を院ると考する傳房寺。人皇五年

代清和天皇の御弟創さる佛は無量の美物なり。先  
きの大山のうそ一時の急ひとあんじある其御迹とく實文  
年中すくゆき見る事多く。御祭大師の御のみを十一面觀音  
四天王の像なり。又油龜和尚村元の清承く。汝泉寺に  
佛さん

馬飼ち明神也。因村のああみねを信玄天武天皇と  
勅請。奉られ也。孝明天皇太友皇子と御されば。化ふ馬了  
馬も。亦般劣れん。たゞ一つの測をとて。馬ふ飼く。ト  
馬の氣力壯健ゆく。天皇遁走す。まことに。消え。乃ふ也。を  
馬飼。モト天皇走る。奈馬の氣力壯健ゆけたゞ。

縁をとく。馬飼ち明神。と。信國。難。渡る。)  
淡泉寺。馬飼神社の傍。御。禪。也。大岩山淡泉寺。と。寺  
は。宣文。年。中。油龜和尚の。因。參。也。かく。油龜和尚の。日。御  
地。ふ。未。更。多。所。參。の。因。迹。を。見。程。かく。廢。也。事。を。も。く。村  
を。ふ。清。起。メ。傳。教。但。千。九。ナ。面。四。全。の。佛。寺。の。地。ふ。う  
ノ。寺。を。建。立。し。源。の。寺。今。の。名。ふ。寺。也。

十。禪。院。因。村。豆。多。所。參。の。事。を。方。れ。星。あ。殿。寺。の。法。也。も。く。  
佛。院。院。村。豆。多。所。參。の。事。を。方。れ。星。あ。殿。寺。の。法。也。も。く。  
を。修。下。星。あ。殿。寺。を。方。れ。星。あ。殿。寺。の。法。也。も。く。

信村とお材たの云出墓の碑ちある石櫃ゆき其中黃金の三  
鶴ゆき多文年中海を手取所領を領す日此事を聞  
てら既とく信者陽を之にかじふふ生のく事ニ  
首ゆく果て石櫃に蓋をひまて内そそい四方  
は自死石を以身より其邊間を左右を分つらう其半小  
鎌矢のぬき物堆くぬきを廻りて白骨ゆき傍よ  
古き、墳一面を力で破壊したのぬ。地漏あさへと傾  
物を今其半、門の櫓ちるよ遍る云々金もん色鑑  
の十二三間余四方もひよ一四方皆圓形もく萬字圓形  
一もつ様みはらかに變へる遍ねる他はうるそひと云

に桜小松ゆき貴人の墓あくべ一惜乎姓ふのあくべも  
を苦寂寥の墓を榮ひて屍少極とほくと君の湯  
ひくづきふくやく況何のむしろくあまの墓を榮く  
其移處のうそれかく猶空き御野絶せよア理アラシ  
即信陽 も信殿協ドリ三町強至地のあからずちうる  
場也立ち居門陽御宇法然上人ゆる住蓮坊要請佛  
せうる元狩を理の場也元祐二年の正月を二つの墓を  
建奉法無常佛事作の所を多引人國制ひてくらむを  
誠も住蓮坊要請佛事作の所を多引人國制ひてくらむを  
を徳人ち信者云後代ニ傳するが事も多矣

号一蓮池を経て、佐倉池と名置、蓋二傍の馬引の零を志  
す。一の名傍を供奉す。は事を仰ぎ、より七日七  
夜其邊船舟と号す。あらわに傍村也。とて至る中四湯  
の詠ふかづく。年無くもんじてよく今村も間ア  
ある。す佐倉池の詠ともとのあら邊道功能は源氏親。  
苗裔實遍する也。

山名義村 も傍村のゆ也

福寿寺 山名義村みあり。岩名山福寿寺と名す。禪  
宗福寿和尚の開基也。

岩倉山

長瀬村 も傍村の栗山也。村名岩倉の半腰ふ  
り。多數の平洋を面す石拂の村也。村民岩倉山の石を搬  
ぐ石工と云ひきの事。

赤穂園村 馬廻の赤穂村也。

桜園川 源三・日野川也。左金毘川也。八里空谷岩  
根山より北流曲折して赤穂村の北から一派もア  
西後園赤後園の牛岡と摩毛山地へ西流て保津  
川とあつて合ふ入る。

近江輿地志略卷之十一  
蒲生郡史八  
西櫻園村 東櫻園村也ああああ  
善光寺川 小き砂川也  
長島の石臼 善光寺川の東の端のりあらをまき一画七  
尺津ち跡すよもあくとえ魚狗の長島の石臼也とす善光寺  
川と号ひは白川上ふさをすの佛を奉る色ともと善光  
寺小屋に參る所善光寺の前を善光寺也と云ふを善陽の稱トスか  
アリ事は御時が過てて寺跡をすすめを善阳の稱トスか  
わもあれ、善陽の稱トスカア多島の石臼も心得

第り此覺の如くは不當もふ實り知れども此と  
向ふまづすものか此處のちふへて居候て左木の木の島  
の柱あとは自然と左半が埋没してから人  
乞をほりぬてもかかへせんあまの木をわざとも  
あらむ事あるべからず

大鷦鷯 古老云豫めのをとねく系其彌漫と不詳  
家次第曰野嵩因具有飯鏡用以治大痴也 老鳥傳情云  
此鏡は皿に大痴の鏡をもて圓をふりてやく其圓成  
後ゆれをと御もと仕敷あら細との世ゆることらの  
鏡第も見ゆるべし

鏡村  
西櫻園林苑あまむら 中山尼姓室毛庵也今  
をみ次もはほくされよ 芳日鷺小鷺昌の娘也と號はる  
かくすはるはる風塵もうる海女もうるうあやめ和也偶偶  
都小春く後村の世の中日うきもふくと翁かくや思ひ  
すつきてそふれうるうくわうと薄人かくもうく後村  
きくらぐく翁かくとくう無名もみくくと翁かく小僧  
翁を、幽女の事とせう後間不幻の下室もみくもみく  
月邊翁とおせう柳葉やし寺傷翁とゆう。蘿葉寺翁も  
あらす其名を傳へうるうと 偶偶度為坦手脚の國を絆  
一脉も傳へやう。本偶人をかくもくあく波多子也得

まち際傍の跡ふくらむ今人形をもてぬあとは保保師  
立也名野御戴保保弘は本偶へき跡一女、應  
豪も見をもしきえども平紀云魏惠子年八月太常  
主氏を獨も人君へ通直討人言旨下焉此國除後帝  
云天五也今平紀云八月三十日將軍才士後御平紀  
張良序曰應和王十六日安安四年三月三十日鳴報  
馬手を創り世凡中ふ怖小くよみうて而ひゆる肉  
因病の災あくみぬを得り其肩歛にの後の名とぞ疾  
事済み髮をそりて剝上ひテ後懷少持りて刀とぞに事少さ  
きてさすき鳥帽のあつて柳枝扇の如きれかたま

陰れ收印を後ノ御鳥帽報に准らざり自ノ御名いいか源  
丸節易徳也

渡山 疎材は菊あればうき一町半鷹山及び毛毛の  
村河西村山をそぞはれり渡山焉す如く渡山  
の名も宜也名所方面が山系より北くちゆる毛毛の傳承  
は山は萬人とも不思議庵生之御の裏に敷毛毛御事にはや洲  
の御ともいゆア後御是毛洲御圓名御紀云日壬申は紫  
天武天皇至法師ア迎ゆる事あて天子の命と爲ふ天御  
持經御天君御北毛洲御事は後御を無事渡山と云  
石清操不疑くはの傳代行のく沙海清れ大君を慕一也

欽仰より先まづお前が爲め候大君の灵をあさへやうか  
清と号すふ所もあらずありあ處の方へえども山林清不  
似い小人云々やかくお見聞を廣び記して清秀の傳ふ  
清秀君み形とて奇也は筆意也

卷之三

御身がどのよかわいもわいか、暮  
るの日はまことに達らひをもれどく  
がゆゑにかまう達りてはき事何より  
すまへと達れども、かくしておはせ  
たる君心の如きとひきあひ思ひ下れども、  
達れども、年經の身も思ひ下れども、

居清梅小は古より著聞多也口教徒教教、かくも  
先ハ七世高齋會の榮敷也、御守もうめを元末  
息、是事、後了。古も之  
ゆきや、後もとを主て、少皮が経て、とてある。居も、少皮  
の内守親翁記小は嘗會のめ近日本後、御守教を修す  
をめを見尾のよき古多事、おとには、御守の三  
たねはと後り也とす

紫雲新松を詠じる山研旅急走待掩

明後日自陰今八年

○仙人石 渡山小河ノ仙翁因基於山似也ノ小名也

○星崎古城址 紋は古城跡御事小河ノ大不無渡氏  
ハ佐ノ本十代而放ニ男也 元祖也兼久丸の尾添かくお  
孔サニ後室ノ射久保二代同也也實和日辰氏も之廢流とも  
徳ノ代ノ五郎の子也又其子持少主城ノ渡賊莫守る  
親良多庫政也松公義娘也少忠功也又承娘也承一族  
清井や松子れ蓮喜を紀一又承孫動以兼良公是續焉  
陣ヨリ承原一族を追侍久其節也總忍勤均之年八月

信長公坐泥小河其後仍傍之加

○相原郷

安養寺村東村古川村森瓦村中野村地圖村

○行川村等七村と云

○安賀寺村

達村の西面カ河ノ字向石津ノ村也傳姓吉

○奥多海町等

大仰藍地也又其村惠其畠也と云

今石佛石隱等敷在大其邊也

○上野村

安養寺村のつゝきと望山寺也所奈の御牛坂天皇

相原七村の産ム御心古修不本意の安巴山也と所奈也と云  
株田小川トトト甚傷也五月移。多れ難馬也。因言即ちとく  
被ふ二人謀事萬人等參軍少義氏上原源五急席龍所へ

至乃法信彦林山被後寺ノ号天台宗比叡山正覺院の事也  
也祐國西德官ノ号也。者也義も付小経行久和年五月元

日山者勢之

○御車墳 在山之東北有古廟一亭，傳呼朱子明

○東村  
安樂寺村北面山河

卷之三

卷之三

○中少縣村 東村之北有三端村有三面尾村曰長村細之村  
細之村八様多村之五俗云是也後君至助付細之小治所也者  
八樣如其獨多之者少之號稱也者是也後君至助付

志賀縣小津小治久

池田村 端村を萩原村と  
行村 中小森村の北山

○安吉郷　以和名村中多々有食楊移村上畠村下利村東川村  
信濃村須恵村西川村以上七村とも之に付く  
○食楊移村　上畠村の東側に堺村を小門村とす  
○西養寺　食楊移村西側一向京

○安幻寺 同前

○安吉大明神法  
倉橋村西有五位安吉五弘古御守不奈  
弘古洋每年五月音多礼布地少不裡着也  
主十禪降

佐山鷹天御言無事御詫びと五社にては礎のみみと二  
社のうち三社

安吉川 日脚の川筋也源は金剛峯より出る主村川其平川  
川寺尾村より西へと源合日脚川ともう葛巻村れあふと流雷  
川も源合日脚川ともう下まで反せ寺川ともう東ふ北ふ流  
きち村上島村の中間から小折つゝそが川と今を乞  
をに保川と名あ下さは横閼川と今をひ村れ中下  
には安吉川と云ふ橋あり多橋あり多橋あり多橋  
やくもふとて石橋也今芳物深めりえむ安吉橋也おサ  
木間津

○上畠村 浄慈寺村は也

○天滿天神社 上畠村山野天神苦心の也

○光陽寺 四村山野一里余から移寺のまも

○大安寺 般若

○弓削村 川上村の東北山野端村を弓村とす

○山王社 弓削村山野天神日吉の神也

○八幡社 同村山野

○阿波陀寺 日村山野

○正福寺 日村山野

東河村 上畠村に西あり 横閑川此流也

○岩之八幡社 東源村あり

○玉輿寺 四村あり 信濃飯道寺もあきし

○方野寺 四村あり 佐平西教寺の事寺

○寺住寺 口村あり 一向宗

○信濃村 大村ありあり

○薬師堂 信濃村あり

○箱飛明神社 口村あり

○須恵村 鶴川村の北あり

○永照寺 須恵村あり 一向宗

○善通寺 口村あり口家

○西川村 西移開村の東ありあり 西川あれあれ村ハ彌生川の  
端ニ西川備後守在任後仁親之兄也死少主歎れわひ之甚後  
義輝乃早他處の節西川朝を爲射口少子節父名義光久  
下須恵村 徒須村ありあり

○總高堂 ハ幡社

○鶴川村 酒多村の東あり 鶴川經久ハ智仁重の子也  
而其の子は神佑の允也と云ふ酒多屋傳持管は鶴川  
謹計りとも云ふ處也付モ

○光住寺 鶴川村あり 一向宗 天祐社口村あり

。鶴川經宿　門限ふゆく而爲か。今櫻ふそく川の傍れ、  
さきも鶴を遣へ湯檜を。而膳さんけのる走了跡也。

。下鶴川村　。七里村　鶴川村れ西あゆ

。鶴都大山浦は七里村ふゆく島浦と澤石がおぬを遷  
すもえん石都鶴都御訓同くひは毛ふや

。萬郎村　七里村はあゆく山ノ村と志町北也。ちばは萬郎村  
そくく大きえく傍りち傍られぬ。今僅少一坊をあり  
。萬郎寺　萬郎村ゆうて終小四跡のとく

。山中村

萬郎村のあゆく

。出立村　山中村はあゆく山ノ村のあら町也

。勝まち鶴都は多郎村からあれかひの月二の三の日祭  
拂る守候ひめ事也

。吉祥庵　日村の津ちま豊ち海老院のあきすみ

。西善寺　日村あゆ一向まあわむきのまきすみ

。善正寺　日村あゆ左肩まつまつ海老院のまも

。光明寺　右りり

。信戸村　山口村れち町あゆ

。苗村殿郭法

。信戸村はい社記曰苗村擁護は田本とちへま

。ふ人皇大孫三代治泉院の席掌西和ニ元年日教は牛村安  
泰山雲ゆきの山手を移す村領は義馬事のあきは雲山閑人王

の事あらず本陰あらまく私とは方或の私事を感  
せり退てはる事無事の事あ付室を捨てたる事半  
考の片境すまじ改心身を拂ひつきわめりが足を踏  
つき瑞義もか天皇宣けひとて示すひは多門  
天子と曰和は鶴馬また淪取にして年々は小作せ  
て今かくまづ御身の事あひ拂ふ跡を去ら事むれ我堂  
所あす御詔書ふ物と思葉をあくすすまふ桂院  
とあき老の面の者達にまづ小作もて必其效す  
ありてともかくへりあつて御院は尼をゆめり  
りくふ今のは徳の里ふ一人で強尼りひちを仰せられま

尼公義と申すく氣ばせられ國代を知りセシ日八食を  
持てて君を傍まで一而安をうながす小吏くふやくやくい  
はぬす。やうて四食をハ一升新あらふの飯を吃て五  
と五十九あつて明御さゆふ汝うるふとく面を拂半ら  
玉ふ魚卵とみすが甚高多大をうな付とまつて御院  
こうも小尼公義夫に思ひをかべて出裡の様を極て  
社壇の靈廟と拂ててアツサ東年序相後年を奉て候  
アツサト八百年ある五アツサ信と萬葉の御院と申す  
えと三歳たふとてア絶縁又立キモニ、一月を乞れり御

是中之言也于中傳之其外而細詮有之余於極乎

之號。雅主小歸，微煙大遙。

李德芳 同村山人一句

小口村  
易至村  
移山

。總高寺　岩村村は福島東北の事務所も相合ひある  
芳乃年紀八十有二年紀山總高寺と考へたる十二面觀  
音不應寺五代觀音

○東江先生碑 稲葉守清氏の碑 清見安正書  
○三河川 中源二ツハ水主官寅於岩根アツシ六甲寅下田  
の東アツシ高橋村の西アツシ今アツシ中村並藤村の中間を走る

少流小野志望音川の事。今少流小野折てに保川と御湖入

○舊村  
德廣村北之

卷之三

鶴や村 鶴村はわからほ極手を考ねてはあつたては無氣の鶴や  
なりすれども、此事は畢竟訓ひ難事であつて、地名は鶴や  
と云ふが、鶴や村のあはれ川河も、鶴園川のゆゑに鶴や川の鶴を  
無氣の鶴とす。其鶴もち恐れを鶴や村とす。

同林亦復一白雲

○御守寺

同村より而至

○葉山寺

同村より

○地蔵堂

同村より

○川上村

信濃村より西より

○善言八幡

川上村より

○光明寺

同村より渋谷より

○地蔵堂

同村より

○渋谷寺村

倉橋村より西より

○竹林寺

渋谷寺村より巻尾山竹林寺より人車を移す

禪多色相傳雪野寺より傍の古跡とも云ふ

△ 松竹林寺より

△ 天神宮

竹林寺の邊より渋谷寺村林村に在り也

○行連寺 同村より禪多

○哥坂道

渋谷寺村より砂利も山石も相傳する和多

或款は松と呼ぶ。又く雪野寺の邊ときつて、草木もさほど多く

滋潤無くすむれば、人相傳達もすむ然ばくもいとう。

○女坂

かづ毛女少時萬々難能と云ひて、かくも相傳す御ゆべし

平生次ふ所、かく女坂と云ひて、古跡寺難高氏時御坂す

アト大字柳ヶ青門裏門とまじ敷かく男坂女坂れ爲り。

事今も堅らも高湯爲相國よりは名稱、雪野寺榮業

の時より安らぎをもて名あらと附會。近頃より

○彦村 淀より東村と西川を隔てり。

○彌成寺 彦村より

○柿村 川上村の東面より

○縁塔寺 柿村よりあるが法師の供養塔也。寺號相傳  
而生三堂の其一也。又三堂より所謂彌生塗材北彌生塗  
茅削材大塗は塗也。

○正幻寺 因村より源藏寺流

○円通寺 因村より

○青雲寺 因村より高家 古巣址因村より無年(據地)とす

○川舟村 林村より東あら河。○津久川舟村より

○毫王寺 津久船よりある毫王寺と年久不知あり。而  
野寺也。毫王寺の北に御墓の地。御祀。首目橋統天皇の御  
宇御墓處也。而え光明天王也。御宇和御草太月日再  
建。而え多喜山毫王寺と年久矣。天皇御免年は山前  
の御川舟村ふ一人の毫王也。小跡時事と名く。而御宇  
御免年は山前川舟村ふ一人の毫王也。而御宇和御草太  
年後御免年は山前川舟村ふ一人の毫王也。而御宇和御草太  
年後御免年は山前川舟村ふ一人の毫王也。而御宇和御草太

初二年後方の所に在り其外奇精多一將軍政義情  
従ふ本宣教細川晴元佐木義賢左近櫻庭等此說文數  
通ひるゝと云ふ旨昔八天台今八天台此律院へ平本源と云八  
面寺也此後考之而清極小碑の鐘也自從之今  
と雲清極小碑也すれど其實寶印并無人證也此而有著  
跡ゆうと云ふ毫跡の出でてはまつて乎非乎此經寺合  
ひ事も此後證も居らず此處を度碑也故此半身像也  
之が如其是性元末某月を據れかのれより以之今也  
正興松小河へ性吳山河へ日中紀略曰延祐十九年二月  
辛丑始用新法本源勢の灰松庵弘施七丈寺及野寺之國

曰天長五年六月丁丑屬清江僧之族人旅野寺移渡大船  
經防水害也

（引文省略）

（引文省略）月の初めと極めてせん縫は因へるる五  
（引文省略）事あつて多うとまつて賄候。雪れせらひ金鐘和琴  
（引文省略）きの手を了見のゆうふれは堅く壁を拂候事も聞  
（引文省略）一ちかにせらひはくはくらじこくあつる地小姓致へり。案薩

○西光寺 川舟村山寺傳光寺也

○東光寺 因村山寺一向宗

○天祐寺 諸ノ物あらは岸井門寺村の寺也

（引文省略）寺主貢在在跡 因村山寺も聞る財納の所

（引文省略）人物門小少く毎娶手も雄世の内小舟行を爲  
（引文省略）元末也智取ゆく翁高教秀彌跡（引文省略）  
○小野崎系石教跡 因村山寺也當時豪傑とし貨人（引文省略）  
（引文省略）

○古城址

○同村より萬壽年（ニ海跡アリ）為毛治命

- 善心寺　同村より一向宗禪敎寺のまきも
- 葛巻村　葛巻村より浮ちる島の浮島のまきも
- あそは山　あそは山より浮島のまきも
- 岩井村　川守村　東高水
- 安樂寺　岩井村より福永を地名蕃譜相傳雪印寺の傍の古跡アリ
- 蒲生野村　蒲生野村より寺宇を地名蕃譜相傳雪印
- 圓興寺　圓興寺より寺宇を地名蕃譜相傳雪印

重氏は吉印西よりはるかに重い人物門出だ

○箕井村 福善村はあらう

○磨家寺 畠井村は津吉が寺の跡地を取る所

○新之浦村 因村あり

○外原村 畠井村はあらう

○西養寺 外原村あり

○八幡山 因村あり

○高野寺 畠井村の山あらう石垣寺は曾竹延祐王の塔の事と関係有り。其塔は龍頭からは鐵か鐵と送る。其後几帳を拂ひて御骨是とのみあせり今は高野寺

○毛久村

○光明寺 痛生善村は津吉の津教院のまきあり

○銀杏木 光明寺は銀杏木の銀杏三像を玄室作たる

○吉川村 痛生善村はあらう

○山下村

○田中村 畠井村はあらう

○墨沙門寺 因村あり

○川森村

○因村あり

○駕轎丁村

川木村北より 駕轎亭ともふ輿を昇下却し

今は古風車を昇るを駕轎亭と云ふ丁ハヨロトテ性男のち郎の事へ事は湯井町丁即村に傳下ありて材ももたむ駕轎亭をもじりてアリ

○若翁八幡社

駕轎丁村より

○東山寺

因村山門院

○地蔵堂

因村山門院尊號堂、聖寶堂也

○石井山慶寺の施因村山門

○柳金源別場 因村山門院尊號堂、聖寶堂也

○上船田村

海ち村れ東北より上原源人新田家所居也

高級より賜ノ新田五郎と先祖歟まゝ二王代刑部の脚  
馬さの偏男と云秀ちりか少將長門守而親もちり龜  
新産の子

○中船田村 上船田のあゆ

○下船田村 中船田村のあゆ

○新松村 中船田村のあゆ

○岸波寺 新松村のあゆある地元の石席相傳け寺聖也  
寺の傍の石跡と其名の如くある小字藤さき山に在

きより地元の新松村を起す

○山王社 沖洲

新松村山

○上平布村 上賀蘭村の北より

○光明寺 上平布村西より篠山越す無数森地に上る也

○籠池 は地と窪池より老の筈すれ毛野地もよし上り

寺山朝晴りは深く出てもあはれ之を

○柳布村 上平布村の北より

○五舞寺 四村のうち妙見山の源流

○龜井坂石屋 五舞寺中より柳布高門より龜井坂坂上峰  
の源流より鳥帽子立谷等より出是山情ふそく甲智敷  
柏木やもゆ井菜穂卿の田跡もよし

○下平布村 柳布村の北より

○西園村 下平布村の東より

○糟塚村 西園村の北より

○内野村 糟塚村の北より

○今里村 糟塚村の東より

○大絞庄 佐木七代の糸放經方に取て縦充牙歴と多

いは佐木本源三秀の組矢也隔々の糸放經方に二重布村の北

之南は真高四重巻蒲伊庭年先組矢実重り愛智山崎

等の組矢行當度既の元組矢も筋は多ふ左近と後

御寄手小移り立すは多兵領と大絞侍久後信長公の時

・脇村

今里村より

○成智寺村 脇村の地ある所は木取川の支流をもととす

○成智寺 則成智寺村なり。赤神山御前寺と号ひ其記曰  
支那之天皇卓代櫻武天皇延喜十八年而御教院寺並創  
の御在所也。わが寺は高野御前寺主源時宣命化の法事無事  
捨理之律也。あらびに高野御前寺今源之二所を存し。御方房  
石垣寺也。碑は重刻版の是。池籠中興へる勅明主の意  
通西蕃降られを仰場か。はくみ十丈清れ御之三行寺とも  
別院の二つある。もくね名塔仰場幸多め。僧人  
始を西蕃取入。出番もさへ無ふ。端席ともす。坐す。金

善住坊主の馬を一頭致され。碑額裏に墨で信長らと  
名うて寺が一ノ室にて。わが寺も多處を高野寺より  
あり。國姓山宇小馬ひ諸地を駆け打り。信長御法下と  
號とす。松谷深く。昭和アラモ。もろ。すく。佛理。地蔵。もる  
鴨小川。而も。鶴鳴川。阿波泡。すく。生捕。生子。

○宿村 猪村れあら。猪村產の村と云ふの曰あら  
い。之等も。之等も。猪村產の村を称す。よの。猪村。ト  
一村。猪村れあら。連坐。多き。猪方。アレ。又。猪。ト  
ナ。ク。ス。ニ。有。ト。猪村。產。の。村。を。称。す。よ。の。猪。村。ト



打耶石却久後新羅人監造治市飯參政

○稻虫村 布施村の面々

二處村 西坡村

○病生跡

○痛生節 はまきを以てく。痛生也。子姓吉乃在民村  
安く荒むる。地無むる。或は古ちや壁。荆棘附。遺廻。塗案  
壁をあゆう。縫合。或院山下。お長の傳。う。届けめき。ぬ。縫合  
之をたかへ。以る。痛生。あゆ。事。ノ日。あれ。天智天皇。総。天皇  
音。痛生。於。遡。迴。壁。若。萩。御。而。鰐。亥。地。高。泥。曰。天皇。七年  
夏。五。月。音。縱。橫。於。痛生。並。云。万。事。年。第一。曰。天皇。漏。探  
痛生。時。俗。歌。一。首。子。將。天。皇。弟。内。臣。及。群。臣。急。経。焉。額

田王

も放を比やして而往ひ故に以て能む。事大里の而生  
三朝の今より四相免揚へ云あは。國教の日小官府上級  
云助御事と云々天武治自元年三月天皇還御が中山而國  
教司事事故而免歸焉。舍明至蔚萩松聖勢傳等の食食  
を於道山に高野皇子自薦深の城以邊くま。同曰元年秋  
七月令下高野而治年三の名也。前秋ゆく。

捨遺事

捨人わち

而もかあた極く小住を取るの事は、恐づ代のあらう  
あります

而もひき餘事は、多種の事は、常の事は、何事もなきひ旨

後後後後

好意

明日多くを乞ひせり。而も御子の御は、多くもせり。而

名事

画房

而もかくとお車は、そくある代の軒をとく。而も

玉吟集

而も御は、晴れ荒田の、空無事と、ふぞりと、一色爲也

新集集

詩人ふじ

とての、望ふ、因縁の、事、而別事、も、ゆす事、が、あり

文集集

之後

今をさる玉が、中より舊事、からて、爲せんやうの、實

。御代長者屋敷跡　藤生西山から方四五町四方许を  
長者屋敷といふ。豪富の者を長者とす。は御代長者也  
のへとあまきもむかひた金持寺の地といふ。考の御代  
天皇時代のく汝長者の石碑と多者塔が之川見哉  
川じくあり

。甚原村　今廃村れあるあり

。南村　甚原村の東あり。○二條村　南村の東あり  
。扇翁　二條村の東あり。○下大森村　扇翁村の東あり  
。上大森村　下大森村の東あり。○ち鳴村　上大森村の東あり  
。弘法寺　上大森村の東あり。○石野村　牛久井村の東  
。一式村　石野村の東あり

近江輿地志略卷之六十三

蒲生郡第十

市原豊村　一式村の東にあり

鳥木村　市原豊村の東にあり

二條村　三木村の少しあるところ

池陽村　二條村の東あるところ

田澤畠村　池陽村の東あるところ代、本郷と甲津畠村  
五郎秀因とよしのとけ不力合はうりゆくまちの

次男なり

一 描田村 源水晶山嶽すむ盤曲——西へ流りて野——甲澤細

村すもと神傍郡山上村の栗と鳴くをも野高野  
ひり面小山て和爾川と名す爰知川へとくゆに入へ

一千草越 織田軍紀によく六角入道承徳をも妙教院はのせ  
並りモ外侵升達アラトアラト高國日野の隣主源生

賢秀又元秀輝御上野布施五郎と栗内す  
千草越す山内を奉公すの下より山内と餘地元

信長の御油あつま山燒喜は房と云移絶の上よ  
義徳おそれ信長と稱すい、り抜くをうなづく

一 小畠山城 南北刀馬野伊勢の国鬼のみする山——佐古

ちげ山中すむ山畠山——名あけぬ生——左近と高生

野乃玉の続山とすかと生え

原村 甲斐物村の西あみと

り久村 多村の少翁とも

庄村 り久村のあこと

林村 ち村の少翁とも

佐久良庄 土佐城と仰ぐに名く下十三村と云

奥師村 林村の少翁とも中々村の至る東二三所とも

大佐久良村 要跡村のあこと

一 中明寺 大佐久良村も一禪堂神護山中明寺とも

小倉中將美濃公安墓也

普光寺 リ有トモニ西子西本院寺の事也

丘社大明神社 リ有トモニ祭神 詳シリ

丘久良川 源ニハ山口村山アリシキ乾木橋を佐久島村乃  
南を多摩モ打石場村の少を越後山村村の南をもす日野川  
と合シテ後園川（くわ）ニ保川（ほり）ノ源入一色原村  
林村（はやしむら）と謂シテ佐久島村の南（こゑ）ニ二ヶ重（にじゆう）日野  
中郷村 佐久島村の北（きた）川を隔テニニ四重（よのう）日野  
（ひの）一里余（よ）ナ

安東寺 中多村ノ一向宗東平教寺乃第也

古城址 リ有ニシテ陣生毛澤守氏郷在城ノ跡（お跡）ノ  
傳人物門（詳シ）

晏東太歲山靈院 リ有トモニ御水に甚（ひ）め移（シ）テ後深（シ）キ  
多（シ）百丈（ヒヤウ）丈（ヒヤウ）亦（シ）切（カ）ツ（シ）トアノ様是（シ）正（マ）ル人  
御門（ごもん）（詳シ）

石野村 中多村东十町許（シテ）名前（シテ）登（シ）行（シ）

布引山 リ村（シテ）晏（ヒヤウ）四里（シテ）行（シ）テ山（シテ）  
多（シ）五百石（シテ）好（シ）名（シテ）千（シテ）石（シテ）山（シテ）行（シ）テの（シテ）

彦村清麿ふ布引の山に豊原首アシノ度たまて近江  
みしをうりて望山アシタカ草まだまきはい壁の名会アシ  
若リ地蔵アシタカ靈佛あり宝殿アシタカれまたてあり難  
寺を祀アシタカるよりかくよ者神生長老アシタカひりまれアリ  
山水アシタカ川ありゆりけ節の内アシタカ松乃臺アシタカ木とせし稀  
乃松アシタカ

一 安部井村 中在ち村の之所許アシタカあくら則近久良川アシタカの東の傍  
より安部井住居アシタカを彷彿アシタカ本家の如體アシタカに應に乱甲賀陣の  
記アシタカ

一 天瑞天神社 安部井村川向アシタカ山の草頭アシタカみわ

一 香川大明神社 ロホツホ川アシタカ七ハ町アシタカ  
念法寺 ロホツホ一向アシタカ小室本領アシタカの東側アシタカ  
萬柳寺 ロホツホ

一 中在ち村 西於井村の西アシタカと連居アシタカ村の東四ア町アシタカ  
迎新寺 中在ち村アシタカ

一 小治村 中在ち村の西四ア町アシタカ洋三ア町アシタカの西の傳アシタカ  
豊矢屋敷 小治村アシタカの傳豊矢アシタカ先鹽アシタカよその石多源  
ナリシ今と赤林アシタカ豊矢之塙アシタカを白化アシタカり候アシタカ  
勅使アシタカ往アシタカ山中アシタカ入アシタカる所アシタカを穿アシタカて石塔アシタカと白化アシタカ

東乃方守墨子

法光寺 小窟村上 佛德山は是もと是の禪宗本尊  
善財如來聖像也

高徳寺 リ村之と一白玉あち多めの馬糞

寶來大明神社

道義を失ひ、心地の悪さは、西の方に譲れ、せば、日本の方  
お侍は右を厚く蒙りて、ちゆうと今度も詫びぬか

里居年  
蓋學者之西原其同人也  
仍之序曰

倪思寺  
望都村  
向之东  
坐竹下  
烹茗

綺田村 まちのあゆくを佐久間川の傳と陽明の  
里の名と稱す。いはゆる櫛の底と云はば綺田村の名  
も伝へる村名より川の名もしくよ。

平林村 緋因ひのゆく有

石塔村 年極有りありて石塔村ありて石塔村ありて石塔村  
大食源氏林因四郎春花の子石塔村重慶あり石塔村之祖  
石塔寺 石塔村ニ之村かより至くニ町解りノ塔を起

宗所處山乃東平之靈臺中興八行賢阿闍梨之寺記曰

大學世尊入滅後阿育大王宮造八萬四千之佛舍利以神通力敷置三千大刹界震旦國十九處日本二个处。一篇湖水澳白石一个处今石塔寺是也雖然往昔未加其塔之所在人主六十六代一條院御宇釋寂照俗名大江定基參列刺史諫議大支裔芝一子也泥塗冠纓投源信之室為求法入大宗國源信作天台向目二十七條付昭寄南湖知禮昭愛姑蘇山水奇秀止吳門寺一朝遊清涼山拜文殊大士向山中之蓮池諸比丘誦經瞻禮曰臨池而作礼是何爲乎一僧答曰汝不知乎日本近州蒲生縣有阿育

王所造之舍利塔每到裔日現瑞名於此池示神具此方回照乃瞻礼宝石塔婆映水中舍利光明耀眼頭懸歡喜無量仍此事雖欲傳于本朝遊方未窮望念賴未遂歸帆難期於是細詒此事封以膠纏而投海上祝曰請汝竟神能護持奉達于日本皇帝已而亦寃弘三年二月佛涅槃尊忌播州明石浦漁人見海上有光告益井寺之僧侶僧侶兩三輩寄船而得一笈朱書曰奏于日本皇帝即僧等奏九皇天皇廢歲即遣勅使於蒲生縣尋覓且寶所更無知者遊獵之土野矣之盛者當所率白夫逸然而統一塚

乃四十八ノ年ノトテ領乃成紀一ノニシヒテ法事山を祭  
成紀寺と名付シモキ年移リ郊原寺移シ今阿育王  
山石塔寺と改シテ中古より扇山、名蓮院跡ト尊  
祀聖行。信為て人には定基シ云後直の御と記。其保  
生年八月八日、清源山の清源院にて、一僧也。向  
礼辞に寂蓮院を守。傍乃云佛滅百年の後、是日  
種福ヨリナリ。八万四千刀劍を聚リ。之等を贊助  
乞リ。八万四千の塔を造リ。之を教主と仰ギ鬼神也。  
舍ノノ所にて達日本ノニ所一起立今ノ所居の信

是たうと一所と湖乃奥乃白石をも思神あやまつて  
連々達此宝塔乃銀廟里映る。北門三つ有之  
礼辨はと宿達去つまつ思ひとす。事く多き  
日向み満る所記如天皇廟境りより御主所邊の  
宝塔近は湖高寺郡源金山。うくすき社すれど  
則勒使とつまつ勅使と鎮守府將軍臣成和之  
ちけ口給佐久の若心服乃竹生壁文之延とあもと  
石塔ノ本を守りよ索ま不力大奇文也。本を  
正。號碑。年紀則り。也。是り。と丈六人。石塔也。  
放く出度。今ノ石塔の宝塔也。ナリ。而領

故地ちとひく阿育王山石塔寺と名けり。う。阿育王  
は塔を造りて御外別法施要集方オニムシテ  
相傳ぬ。寺ノ額下馬れあり。と。弘即之の弟あり。と  
鐵田信長下馬れをあらゆ。川ガ額も。其後テ燈籠  
正。獨多々。鹽喜院及之國傳記。大に宝塔。而  
仁。ノ。波國。ナラク。波羅。而。波羅。ナラカ。モ。シ。ア。ヌ。レ  
そ。ウ。ノ。ク。寺。元。ト。ク。レ。ト。ク。モ。ト。想。出。ム。ト。入。居。ト。  
傍。源。也。ト。拜。也。ト。傍。テ。遙。阿。育。王。の。塔。ノ。寺。ト。テ。  
日本。ノ。シ。ト。ク。本。寺。紀。ノ。如。キ。多。載。ト。け。宝。塔。

錄定墓號竈寺赴三河安死不堪悲痛祝髮為僧改  
名寂懸。至皇朝嘉慶四十三日本乃仍乃第下床坐之  
手揮一偈曰。如是阿育王塔乃活潑地。極口  
至死。日本之法師死殊林。九年之後。有法師  
九十一曰倭國在此洲外大海中距會稽方徐里僅  
大業初被國宦人會壓。未此孚同內外傳知。至唐貞  
觀九年。與本國道俗七人方還倭國。未去之持京內  
大德毎回被國弘法之事。因問阿育王依經所說佛  
入涅槃。一百年後出世取佛八國舍利使諸鬼神一

億家為一佛塔造八万四千塔徧圓浮洲彼國佛法  
晚至求知已前有阿育王塔不會承考曰彼國文字  
不說無所承據然驗其靈迹則有所歸故被土人周  
覽土地徃々得古塔靈互盤佛諸儀相數放神芝種々  
奇瑞詳此喜應故知先有也々一枝下見林日本異  
稱傳曰本朝之學生無不會承恐福因之訛福因之事  
見于日本書紀云宋史曰西河離古人劉薩河於丹  
陽城札阿育王塔見放光明集衆塔得鐵函中又  
有銀函盛舍利及仏瓦髮々序文曰何有之後日本是  
處故而得之而承本紀之也本草也上文今

四十九と達三の志願あつて四十ハタミお山一  
多喜院が移りとモロトモハ晴日松山よりはま  
山とよもハ陽山の侍うすとて源未ノモトハ晴日  
ありげが移り始慶倉山とちうく後日松山に移り  
事ハ承知むるをりとモロ石垣とくス信ちりて  
多喜院は墓も至近太子ハモヘシニ一峰院の雪  
多喜院は墓も至近太子ハモヘシニ一峰院の雪  
は仰とせんそくは河翁王侯近きに水へハくろ  
らモトモトモトモトモトモトモトモトモトモト  
はゆれし氣を

一  
うつモトモトモヤ勤使侍争多将軍歿報と  
さとモトモトモトモトモトモトモトモトモトモ  
ヘシに人なきとて活きる足をもがの立たず  
とのと捨恭公曰近に廟と御石碑等の音王翁  
鬼神とて八万四十の候と達一い是モ一  
事と幸便と云うとては云てひ遠いと云  
うと云う所のとう草と経くと云う石碑の邊  
とゆくとゆくとゆくとゆくとゆくとゆくとゆく  
とゆくとゆくとゆくとゆくとゆくとゆくとゆく

收き、眼をふぞりハ多シ。菩薩の十恵之漏の大  
海立塵云動り風ハぬり。すす怪縁もぬれば、  
日もなまくのひの眼とて、あはむの在りま、  
のみたら、トトトトトと教くを行ひちる。  
やや様めに通しげふ。如ト、阿育王姓も孔薩  
氏王位も。一一日於臨の威儀とゆく。國は梵  
と統修を列ぎ。法の冠ゆとば。西度と等  
天下とひさし佛門と通じて三千と行ひ。八万四千  
の僧徒と金剛とちぢれと神呪と統紀とぞう  
一 阿育王石塔 洋ノ原ノ塔也

一 空知寺墓 石塔ノ頭因ノテ、壁モ空知墓也。洋  
ノ原ノ塔也。

一大墓 リリ芝臺も大字。事ハ石塔頭也。多レトモ  
一幸村 石塔村也。有リ行。

一 上少翁村 村名也。西也。一石塔村也。有リ行。

一下少翁村 上少翁村也。有リ行。

一 今村 アサカ村也。西也。河井た馬也。原明ハ  
代々少翁村也。原の子就左衛門也。有リ行。

一大室天王社の金剛也。

一 願成寺 日暮の玉尾山金剛と毘沙門天  
の寳庫とを參りたる所より金剛の形刻く當く  
是よむをちの像大と修て近に大師と安生院は  
像と云ふと是よむ五觀のうちと云くちのえ  
ト ち坊なれと後醍醐天皇一草ものと  
三保の御再興ノ碑主と云ひ尔來曹曰高麗  
左媛化 い今村へ行け今ち近を走る處と  
木村 い今村の西へ行けあれど修方の二官と  
此處の北の峠と木村たる所近處を子細  
かかまひ左媛化修方の名としと  
かくと

一 木村 村外の西山と川の傍と接す  
山の裏と家と後院とし、旁は木村屋  
室事は後院の事とす原と字を移転する  
かくと云ふ

一 宮宿年 リリイ

一 支那土山 四方を山地とし古名の如きは少く云  
又較石傍石天狗石とて之類もいわゞ較石も較の  
事とす 傍石も傍の事とむれどよ

輿地志畧卷之六十三終

近江國輿地志畧卷之六十四

蒲生郡第十一

○西生郷

○東生郷 東生郷は大郷名吸和名野中をうち信太郷  
下野ノ云其限界と洋御大先日野仁貞等は其名を出生地と  
云ふト一國半清脚除新村共四三のほへ近ヘ西生郷の之  
他より改正と修成

○市万石 疆界を萬石市万村に改名す

○新生村

新生村の事

○板井清水

市河村の日野、二里所

宿古今多

入久も立民

太保云山清川水附大石屋守の裏内山口と被石屋守勅  
使れゆく

○迎ひす板井の清水多々木庄有地主の水原  
車坂　内折あり。是石塙より御便がある。又御井御井  
○大橋村　市る材はあらわし大橋因幡也。傳うある見を也  
傳乳源小出ち高十三萬石附承らえられ頃佐木家と云ふ也  
ゆかさ後方陽通三口ノ市信長也。又お地手下す也  
○田井村　大橋村のあらわ

○名村　田井村のあらわし。又御井御井御井御井御井御井  
○豊田村　田井村のあらわし  
○田通寺　豊田村のあらわし  
○梵林寺　岡村あり。經云桓武天皇建三面  
○五位堂大橋村の御社　岡村あり。多那の洋  
○麻生村　田井村のあらわし  
○赤人寺　舞村の有。袁老山赤人寺と云。今も伝亨  
翁と云。只下に言と云。是ちも御井音山を有。今也  
之を傳云。此地の多事。出生の地と云。片桐山御教院山  
多事。今武天皇御代上後圓山多事。出生の地と云。元治元

古代の長ちくま桂氏酒山を爲社事に天皇へ遣て云  
亡後上山き方老人と曰く一首深秘物曰く和田也第宋も云  
乃ち亦くはむと幕山をもむかし人和歌を詠すふよつて  
至るる哥子のす。由縫山ノ川瀬ハ主合山也今山也  
和歌山津の邊れ山のみとてとゆきゆきハ君也すは  
とあくも年もかくとくとくはせの人生ゆけうする明之益  
赤人ノ力也すは深紙の傳所

○終里○古傳う事人きひ四つ山と今山とおもてとく  
云と云事とふ名日野山鳥井山と云葉高山とすも後醍醐  
院御用の事事は鶴と下鶴ともゆきふね山とす也

### 金糸糸

新光院

黒ののき、空ぬかうとてゆき、骨の黒者すとく  
絆、拂りとかげ、夕たみほくと拂そつむるべき

### 鎧物師村

易や材れぬふ

### 涌泉寺

鎧物師村あら、禪宗系跡寺の事き

### 西移寺

日村あら、淨のま

### 蓮幻寺

日村あら、而ま車かなるの事く

### 行園左近被法

日村あら、多神の解

### 金糸

古傳相馬往古町村山主事とく他萬葉

小ゆき月す退耕とく其跡ふ小ゆく

○石原村

鑄物作材あらわし

○双渓寺

石原村あらわし

○武田山神社

同村あらわし祭神不詳瀬お伊村れ竹田川

浦と向洋あり

○小坂村

石原村あらわし多小野瀬御石川村多あらわ

れを祀る

礼物をまつ佑木主翁瀬崎法圓と流乳玉玉器を

を用ひておほいの波とく通じ姓の由は四年の秋と分

けそれよりさかのぼれば是よりは良吉と云ふ

所す布施物を取事と名ひ其頭は山伏の事す

民俗毛と云ふ者居とふ今中空ノ山ノ取引と云ふ

民俗毛と云ふ者居とふ今中空ノ山ノ取引と云ふ

西紅色山岩高麗ハニ麻生氏勇へ代り相後法若御中成  
綿少酒の中野御小五佐也

○武田山神社

小岩村あらわし石原村へ勧請久

○西方寺

同村あらわし一面多あらわしの事疏日野多ある  
のあります

○あ福寺

同村あらわし海苔と岩の津屋敷院のあります

○円林寺

同村あらわし西里山円林寺と号す天台宗云僧へ

あれを守るのをうる泰山と稱するのあります

○勝田村

小岩村あらわし

○鎌木村 痛の村は西北より玄蕃山ふ代白尾一幡と内  
て所といふ泡生川は北流の筋筋と勢あふれ鎌木馬助天井  
まつ鳥を奉納す

○三枝村 中村村はあらわ

○中山村 三枝村は堺山小村より古町あり  
○金剛寺 中村考西中山金剛寺ときと年廢ノ皇元  
開基やくあはる十二面觀音の像、則ちあれ照刹セモ之  
有日差候舊考をもとく。寺領二石方甚無事れ地う  
しめ元龜の寺號あらず。院鳥有より今碑ふ其形の存  
せり。湯義ふと同の源仁清門義経破の後、傍塲に平治  
清十

の源國島田山ふと古名を存するも候  
○鎌池 金剛寺の西あれ早許山也と曰ふのゆえ  
方丈大許の方池也甚深き事起て人景旱より金  
剛寺のあらぬ寺佛の金剛の寺号を以て小寺入金剛池  
水やほゆ。時は必あらずとも

○熊野三所権現社 金剛寺より東内あり。鳥ふ七年前  
某人浮海れ阿闍梨す後懺悔。世主を仰拂と後勧

○山王社 中山村少く  
○漢法房寺社 因知あり

○双子村

○小御門村 三核母村の事あり

○大蓮寺 小御門村より福多

○寺子屋 日村より津多

○内池村 小御門村の事あり

○渡神社 内池村より多神多洋

○櫻原院 因村より津多櫻原院、麻生高郷の  
色之方縁より席巻妻は名櫻原院真精と名く自多  
の事多之方縁から日櫻原院を建立し

○慶光寺 因村より日櫻原院十八町粟野一町あるを尊

○事院 番宿寺情獨懶乃の物也。止焉より聖母を娘  
近ひるよひもの里山城 楊柳の木にかくみゆき御  
情獨不持ひ氣も今ふ什物也。

○梅田村 内池村の事あり

○山陽寺 梅田村より一町あるを有むるの事也

○梅田川 源水當流而上也。其流也者、甲  
津相有りて其事を主御源江宇村の事と經ても智恵也  
時有のあつやく和氣川となり也智川もく湖也  
○千鶴師村 梅田村より一町あるを有むる

○久節松理社 十鶴師村より

○室之原村 因村の北一面があわせたまの東流へ

○西田村 同村の北

○野田村 内池村とあります

○あせ寺村 鹿田村より西京東むかひの東流へ

○野郭村 ○野口村 八幡社中宮村あり

○上牧田村 小御門村は東流

○二木本 上牧田村邊に松の樹と相馬御向太鼓御邊あれ建葉

○柿村 ○山中村 上牧田村北也

○目野庄 畏野村より一里東方村井林村名原村を日

野町と云ふ。ある名石金大年傳より八重塚を尾とする言

金大年憲殿ある旨詔仰り先を日野町と云ふハ豊臣秀吉云  
名前も以て滿後免拂え 東京郡界御名古屋日野町、松尾  
西ノ原町太田町牛久町新川町新町中野町墨田町神田  
町南大庭町墨地町銀町上御宿町北御宿町墨田町松町  
今町下御宿町松野町御墨町御墨町仕切町大将軍町野町  
内池町塙町北今町大丸ら桂町所、左近町所、左近橋小は多子  
左角西多町北今町大丸ら桂町所、左近町所、左近橋小は多子  
遺迹跡とかう日本紀多子こう文字を添下書改りテアリ  
日野と云ふと訓相手一族のものとのまを署せらるテアリ

○綿向太尉神社 村野町少佐 須家綿天總自命之祐記曰、人皇・宇代鉛明天皇六年夏四月綿向・奉手道・勅使・とす。

村井今地ふ勅清・祐達主事者之義元己酉の暮火災相役  
在萬村免幕松波勘定畠内房・附調政大領年と源を山西管  
至源西國等太効とて祐改再興たる壬午秋多大ひ多く又  
祐燒滅ほし侍佐紀勅額北室等甚篤玉と爲人勿天父酉西  
の年中野馬主藤生下地寺新家秀造焉・祐領才奪  
背すあり痛生並ひ絶多附り又絶・東照宮祐領才奪  
附りもひ・于今正月の御祭事より多き毎年四月  
初の吉の日ニツク時半のまゝニテ祐裏ハ十六町石村れ而  
後脚西野・御旅所也山津ニテ其外より者舞蛇官へあり物と  
云人柱との被殺等と神靈お経あまとの日野中の金丸・祐裏三

ワハ天穗日命 村井戸前 八幡毛色 沢生祐 負紀章信よき

○村井戸前法 僧向本殿の傍より參神と洋

○八幡法 右口引

○川原法 日野本町より奈神祇國牛頭天皇へ

○西ノ宮 日野西多町より

○曉宮 日町より

○正室寺 四大達院町より一町余西をひきのま流域に親出  
上人蓮如上人一幅二像の御物け 蓮如以筆へ正室寺と云額す  
蓮如筆へ蓮如移し地小佐近は一町余く一立あら  
額も之

○布袋寺 四松尾町より口引

○大聖寺 四大達院町より海老堂賜也ふ大聖寺と号す  
乎あゆ院地主此院之瑞雲山大聖寺と云ふと額へ海老院

○皇女書院院光る御筆と御筆

○山王法 但み大達院町より

○大將軍法

○無仙寺 四町より西をひきのまの裏山

○元園寺 四町より口引

○遠久寺

○清明寺 日光の今町より西をひきのまの裏山

○無教寺 因幡師町から西三ノ門

○願謹寺 因長得町から西三ノ門の北のまろ

○信學院 口兵服町から西三ノ門を下る  
東智恩寺の本堂と蒲生智園の園亭とを洋文記述  
えうう信学院、蒲生貞秀とまく貞秀入道と智園と云ふ  
と秀と祖文と

○蒲生主秀墓 口村井町 やす蒲生下野守定秀  
之墓とも書く。賞美文也。將孫大師と左近主と下野守と  
云ふ。松葉がよく入た。快輪と角端牙鑄更和尚の法號だ。承  
五つ以夜生天正七年己卯二月十七日午後卒に定秀

院主智良寺人

○承福寺 因大庭町から西三ノ門花園院承福寺主  
三主の勅額を賜り古昔ハ龜引流のまふくは危佐彌と  
いふゆとりあり。古ふくか。今西ち承福寺のまき

○仁正寺村 日跡の本堂と日跡と仁正寺と累から移り  
お蒲生在原の時、守節をさせし今ハ仁正寺と云市村氏を領  
ほ町三面から長サ十八町

○無教寺 仁正寺村から西三ノ門を下る。無教寺の本流と蓮如  
上人無教寺の額を書けり。

○教仙寺 因村名因ぶ。聖寺 口御。先因寺より

○清言寺 口村より傳ひま

○清淨寺 口村より傳ひま

○古城址

口村南の山中中野の原と申し高生山と申す  
せす跡と薄木戸田家爲る源氏原秀郷絶ほの流域下野國少  
判官多良氏其の苗裔也秀郷生秀吉於之を守。連绵く在  
候。元亨建武の際秀生母豊後秀高ゆゑに之の嘴、秀高  
秀吉の有りて承秀の嘴も秀高下野を守秀口左衛門  
支曾秀門息名高氏郷後信長は秀吉の子秀忠の  
秀吉功代と称し信長は即爲不効君と之謹一は萬川取  
無功行はれあらず。秀吉は佐々木州鳩澤令氣ノ  
人等村 日脚の北七八丈あり

墨家の圓香春う顧か。先蕙大功行秀吉公印鑄らく  
伊勢ふね子爵と松坂と改十八方石を領仄其後山田原陣奥  
州陣大功行と奥州百万石を賜。後更秀大方石より  
又版岡づくち移万石をかく守勢ノ源降不確此後家絶。

近江縣地志略卷之六十五

蒲生郡第十二

○松尾山村 大名材村萬石山即十八町地

○正明寺 松尾山村有法輪山西院寺之寺也寺曰寺乃里  
德方多開闢乃陽之溪系天台主流境內有三院寺十三其源傳  
長公之時多台家有院俗侶忘還於官山又遇甚多鑿壁  
荒廢為院皆為民居唯本寺觀世音左石不動思惟門天乃以  
大石如來像然安坐於一石傍之中松尾山號玄氏某奉香史  
多奉承主事後水尾法皇至世因一絲和尚入舟欲語及報音

支先乞上慶年盛美應由毛正保元年甲申七月十八日勅

差代祭獻白銀三百枚頃多氏謁岩倉大納言基西納言兩駕

奏汝謝汝奉勅而爲委極汝厥乃有參第詔送焉甚

功未後一無和尚示寂妙心流下俗文看守圓寂住持清

方達爾源流下總和尚相政佐持少滿擅執也祇登龜山

清惠演西崖丙申無闇山七年夏四月物而明等願勅筆

也乞之法苑隱普明院高祖以嘉附海水庵天皇尊像也

又普明院高祖以嘉附海水庵天皇尊像也

院主の御筆也

○河原村 松尾山村の南より仁多より北に有る野。平野

○常光寺 沖原村より移る

○一本木村 仁正寺村の東五丁所より

○錦向明神社 一本木村より

○直入寺 因村より南を走る車の東側也

○常福寺 因村より津ムニ多云淨教院の事也

○八幡松 因村より

○音羽村 一本木村の三町東より日歸ノ一里あリ

○紫雲寺 紫雲寺の事也

○本音大社神社 同村より

○雲連寺 因村より津ムニ多云淨教院の事也

○言先寺 因村から傳ひま

○養泉寺 因村から傳ひま

村山から傳ひま

○御骨堂 因村から傳ひ仁明天皇の父布押監皇子の  
御骨塚を教云源生智國の骨塚也と云ふ時移押監皇  
子の御骨塚を傳へる事明々日本紀旧良紀年少曰顯宗天皇元  
年春二月詔曰先王遭難多難殞命荒郊朕在幼年亡逃  
自匿根過求迹併負大業復立所骨莫知者詔畢與  
皇太子僕計注突厥施而終自縊乞月召喪香痛帝親歴  
問一老嫗進曰置目知御掌埋れ情以奉示於是帝令皇子僕

計注突厥老嫗婦孝子近江赤田錦蛇登陸中塗出而見  
果如婦言停危亥旁深更慟自古以來更め新酸仲多之  
尸交接御骨莫終別名多有盤坂白馬乳母奏曰仲多名  
土高墮落不可別於陵由乳母相別獨獨而竟雖  
別四支渤海由是仍於牧屋跡中造紀變陵相似如一墓  
儀無異也其處跡多々一弓弓之智國之骨塚也即此  
名と云うやむ伝云因馬語入侍之死後とある  
庸生象牙柱初アムハラニケテ少風ハヤキシテト  
即此が象牙柱傳承する云ハラニケテ少風ハヤキシテト

あ村の田のあふりあるを以智闇<sup>シタマ</sup>ニ跡<sup>シテ</sup>明々<sup>ナリ</sup>

智闇<sup>シタマ</sup>義行<sup>ヨシヒコ</sup>則日野の後樂陽<sup>ヲ</sup>信聖院修<sup>ル</sup>ト

○古城址 音羽村の奥の山<sup>ノ</sup>上<sup>ノ</sup>謫生智闇<sup>シタマ</sup>ノ所<sup>ト</sup>今無<sup>ク</sup>

古井水<sup>ヲ</sup>破<sup>ル</sup>寺<sup>ノ</sup>も佐原<sup>ノ</sup>義濃住士<sup>ヲ</sup>波<sup>チ</sup>仰<sup>ム</sup>者<sup>は</sup>城<sup>ミ</sup>  
國<sup>モ</sup>城中<sup>ト</sup>も<sup>ク</sup>矢文<sup>ヲ</sup>射<sup>シ</sup>テ<sup>ク</sup>一首<sup>ノ</sup>歌<sup>シ</sup>解<sup>シ</sup>テ<sup>ク</sup>一物<sup>ケ</sup>け<sup>ル</sup>  
たゞ<sup>ク</sup>四幅<sup>ヨリ</sup>一幅<sup>ヲ</sup>射<sup>シ</sup>テ<sup>ク</sup>一幅<sup>ヲ</sup>アラク<sup>ト</sup>お及<sup>シ</sup>モ<sup>ト</sup>とく  
軍<sup>を</sup>解<sup>シ</sup>テ<sup>ク</sup>義濃<sup>ヲ</sup>仰<sup>ム</sup>事<sup>アリ</sup>已<sup>ハ</sup>石陣<sup>ヲ</sup>他人<sup>ヲ</sup>責<sup>メ</sup>シ<sup>ム</sup>  
萬<sup>生</sup>家集<sup>フ</sup>正<sup>ニ</sup>二年<sup>三月</sup>音羽<sup>ノ</sup>城<sup>ヤ</sup>ト<sup>ク</sup>ト<sup>ク</sup>  
この山<sup>ノ</sup>上<sup>ノ</sup>治<sup>シ</sup>テ<sup>ク</sup>ましん<sup>ツ</sup>の山<sup>ノ</sup>上<sup>ノ</sup>せぬ雪<sup>の</sup>山<sup>ノ</sup>上<sup>ノ</sup>とくも<sup>ク</sup>  
はく<sup>ト</sup>に浮<sup>シ</sup>玉<sup>アリ</sup>て<sup>ク</sup>山<sup>ノ</sup>上<sup>ノ</sup>ねむ<sup>シ</sup>て<sup>ク</sup>雪<sup>の</sup>山<sup>ノ</sup>上<sup>ノ</sup>とくも<sup>ク</sup>

○新言 音羽村<sup>カ</sup>アリ<sup>ミ</sup>義王村<sup>カ</sup>アリ<sup>ミ</sup>鷺<sup>カ</sup>アリ<sup>ミ</sup>那智村<sup>カ</sup>那智村<sup>ミ</sup>  
移<sup>シ</sup>夢<sup>ム</sup>忍州<sup>ハ</sup>三鷺<sup>跡</sup>を移<sup>セ</sup>ル<sup>ト</sup>延<sup>ニ</sup>野<sup>三</sup>所<sup>ト</sup>伊勢並尊事<sup>ト</sup>  
解<sup>シ</sup>男神<sup>神速王</sup>男神<sup>ニ</sup>三鷺<sup>跡</sup>の事<sup>停</sup>止<sup>ス</sup>御<sup>紀</sup>名<sup>傳</sup>喜<sup>テ</sup><sup>ク</sup>  
○義王村 音羽村<sup>の</sup>ほ<sup>き</sup>日野<sup>ト</sup>一里半<sup>也</sup>義王村<sup>觀</sup>ら<sup>ム</sup>  
了<sup>シ</sup>キ<sup>ム</sup>と<sup>ク</sup>南北<sup>の</sup>義王村<sup>カ</sup>河<sup>を</sup>隔<sup>テ</sup>テ<sup>ク</sup>

○日野川 沢ニ一ツハ伊勢國<sup>ア</sup>多<sup>ニ</sup>間<sup>カ</sup>生<sup>平</sup>あ<sup>村</sup>の雪<sup>を</sup>津<sup>カ</sup>  
菊<sup>花</sup>義<sup>王</sup>村<sup>の</sup>北<sup>を</sup>毛<sup>井</sup>守<sup>尼</sup>の<sup>山</sup>を經<sup>シ</sup>中<sup>山</sup>而<sup>生</sup>喜<sup>レ</sup>北<sup>を</sup>  
毛<sup>井</sup>守<sup>名</sup>川<sup>ト</sup>今<sup>ハ</sup>橋<sup>闘</sup>川<sup>ト</sup>ア<sup>ク</sup>一<sup>度</sup>川<sup>ト</sup>テ<sup>ク</sup>湖<sup>入</sup>テ<sup>ク</sup>  
西<sup>を</sup>多<sup>木</sup>村<sup>の</sup>山<sup>間</sup>生<sup>北</sup>あ<sup>村</sup>を<sup>通</sup>テ<sup>ク</sup>一<sup>度</sup>と<sup>テ</sup>此<sup>日</sup>野<sup>川</sup>  
毛<sup>井</sup>守<sup>川</sup>ト<sup>セ</sup>並<sup>川</sup>ト<sup>セ</sup>も<sup>う</sup>と<sup>も</sup>

○藏王権現社 藏王村高野村先代云從古大和國志郎  
の藏王権現は地山藏前村故あまし

○蒲櫻 藏王松の傍から御みをもてのする限清櫻村  
やむ古歌やみみて蒲櫻のゆきとおもひゆめ御み事すふじ力  
ハ櫻の古跡り皆名高いとの里のかば櫻はあれくも厚清  
梅もふ邊にあらゆる所のかば櫻とよす而生歌清物附  
材れりとあらゆる所の櫻物名うつて櫻物本遺逸野  
該世櫻物ある書かてうる遺逸野は日本紀より而生  
神れ名也故ふ清物附材れりとて、海引と云ふ里  
歌み鶴あらむち材れり櫻野下の名と云名ふかば櫻の古跡を  
櫻とゆる新たに附

設てうらうのと古歌ふとみひとのうば櫻は地うる藏王  
桜現吉野ふすりとく櫻花をもすりて桜現は地ふ山鷲  
アリ故櫻又浦あくわきうが櫻は花と色麗ふかく跡  
更麗色ゆ。元へ和色ふ名櫻と書ふ古事記物れ名すは  
櫻とゆる新たに附

○聞室寺 四村うち一向ぶ東本願寺の事流津等郡金  
童弘誓寺のまき

○寂照寺 四村うち移ふも智那高野山深見山まき

○熊野本宮 四村うち事前ふ詳

北細村

藏王村の八町許北から日野下へ一里半许東に日本

紀旧事記小木田錦山作古事紀には久多錦山化まし今程

ア北細山化リカキクケアノ通音カミクノタラキメト諾モア雄略天

皇木田錦の牧屋野ふ市四ノ皇子を射殺事内ノ射殺ニ也  
地ハ錦掛村カモハ源掛村れ峰下小ちくはい地。其時游猿

の地也錦掛村より峰下及地圓を走ル時日明ニ

弘教寺 北細村より一向宗あらが寺のま處

八幡社 因村山

○錦向山 蒲生甲原の裏山也。古國カム伊吹灵山以西錦向  
とく四ノ高山也東の稜ハ甲賀北の尾崎ハ神崎西南ハ蒲生也

日野山山下より二重なり鶯なり絶頂カム七十年丁なり地頂  
小錦向大明神の社有リ又年中ノ遙多大明神祐頃の地也錦  
向大明神ハ天穗日命也人皇三十代鈴明天皇六年夏四月は  
地少鷄多アシテ後日野の村井少移ヒ奉。毎年四月智弘公氏  
人ヒ地ヲ參拜モあれを近ヘ參ム山之半腰小室を馬場ヒ  
カシヒムシヒ上六合を看くのり誰一其在上小山伏居場ト云  
ヒ清泉カム相傳古昔ハ近江二国の山伏左峯入余らをも出  
ヒ参テノリ。山伏居場ハ山伏休息の場ト云

○御幸跡 锦向山山之雄畧天皇御幸カム故の名ナリ余  
語くみづキ御ム

○熊野村 北細村の東より日歸山二里東也平る村トヨ十三  
町村 熊野松原すなましを以てく。

○熊野權理社 熊野村より先紀伊三熊野のみ都山と擅  
藏王村本宮より音羽村を引き御本宮本御前を司ケ  
ノ後ノ事ニ古ハ三熊野小熊野村からつせし禁御野村  
木本宮新あらかに相馬、紀伊の熊野玉石寺諸皇子  
群臣年を山より月御の御定すも名宿ゆしゆやく月  
輪殿下の御跡村の氏家より

○持現澣 同山より民家ノ土御許ある高ツモア御  
省の庵あるそくへ墓大觀あり澣則日歸川の水澣也御年  
久

七月七日ト八月八日その間頑痴狂乱の數の多く澣  
ゆく駒

○西明寺村北細村北より日歸山二里東也村より西明寺  
乃ノ故ふ名く之

○西明寺 西明寺村高木山山西明寺寺と号ス京天台宗之略  
傳記曰是高木寺也云代用明天皇の皇孫聖德太子產靈之地  
ゆく童子佛像在焉、其後年代後崇光院天喜元年  
以龜山正妙房阿闍梨聖深居れと奉ん原木白壁を化す  
或は沼邊山中是彼沼池へ在りて事ふ南く其以天下名草

聖源則ハ大慈王を勸請一請雨の法を行ふ天下大霖也  
まゝうう竟王山より呼り本尊土面觀音是應の地ありすとて大慈山也  
名く則今の山号是之本尊土面觀音長三尺聖化をすの仰之  
初比叡山楞嚴院山門下を聖源夢れ若也小由く則當  
寺少移へ附至六不動明王毘沙門天得少ちるの化し聖音  
の額ハ法性寺入居殿下の筆跡也其後セ十七代後白河法皇勅  
ノミ教長至く額をかくらあすみ賜り承く法皇の御  
御額也と云き、白院真行八十一代後深草院の御掌一來  
國白実性額を書くと號。其後星霜を経て寺院惠  
被取し惟本尊の顔を存す多が年中本堂の和尚也

少事ア壹宇を再興一佛像を修復し始て禪院も又中興  
山へ延宝五年の春近衛左大臣基運公西明院主四丈の額を  
贈らるゝと云ひ

○八町野村。木通寺八町野村也。而本村也野村の本流也。

○辛の村。鷺野村也。而本村也。日郎より至半也。而村のやう  
いともさと出へ上品く通かねり。而本村也。而本村也。而本村也。

○本溝村。日郎よりみら町也。

○法光寺。布陣村也。而本村也。而本村也。

○馬鹿寺。因村也。而本村也。而本村也。

○桙川村。八幡社。桙川村也。

○幸原村 日郎の七八町あるより

○幸原村 幸原村ある一町ふあやれ村の幸原也

○幸原村 幸原村ある一町ふあやれ村の幸原也

○門先寺 幸原村ある一向字西をれ寺の幸原也

○櫛掛村 日郎より一里南より仁寺より五町掛山城の五町

○櫛掛村 日郎より一里南より仁寺より五町掛山城の五町  
は地名留綿の故名也。日本紀雄略年賀三年冬十月登幸天皇  
恨穴穗天皇曾欲以市主御靈皇帝而遣囁後市乃使  
人於市主御靈皇帝陽朔後孫初祖御節曰近に移ふ而  
君驛翁言今移出石未回拂歎御靈帝每多御幸皇孟  
冬徂歲の月寒風肅々と晨霧過を於郊跡以地附市也

○押盈皇子乃隨馳獮於毛大泊游天皇夢テ驥馬而陽呼  
曰楊有即射殺市因得盈皇子之地也。音羽村の馬骨塚  
へ及程二千町涉ありは地也。く彼市主皇の御骨と捨のひい  
私心ひかくす。四千丁所東小甲寅御病生御の異所ひむ思案  
石井も。一時作手木義鶴。要塞の地理者。寺落去取事。公  
少仕掛り。伊賀甲賀の東方の虎口である。

○錦掛川 源は源ヶ村との間より少偏曲。ある田村の北よ  
りく日郎川と名す。

○扇谷衛池 清色村から扇谷水高秀紀。利根河秀紀  
の扇谷嘗ね文の高鄉。隣り高鄉秀紀地を様々と称するの故

秀紀城より巻く高御を防ぐ高御責きた城固しと不破  
於是和睦となり高御則善和善とも者を多く秀紀小毒を領  
ちし秀紀從事く法事小とち力と核と善知能を得しも  
す。かく秀紀自殺く假よす也か死へて既に後池  
る。藤三島の池と曰き。洋山廟生軍紀史えり

○古城址　圓わたり則藤三島后池の跡か  
○娘が淵姉、渕　鎌抄村より坂古の池へと坂古の池の伏  
木多ふ出う。多經へつゝへ三さきもアヌカヨウこれ  
池ゆア多く芦鴨鷺等この池は鳥巣の文アヤカモキ  
のふの辺へアリテ先主アサヒト

○やまき滝石　澗流落葉落池の水流也。前也鴻勦の石よ  
き向太甚奇觀也。一里と奥かは泉水岩。長一間余の石  
二戸四方の箱の如く小石と

○清慶寺　鍍拂村より一向。あち彌寺の水流。

○尊明寺　因村より一向。本尊寺の水流。

○光明寺　因村より一向。

○正法寺　因村より後之山正法寺より本尊土面觀音長

五丈八寸行基化則行基開基の地。禪家多處すます。

○清水稻村　日野より高田町あわら。石田村のあわら。

○先延寺　清水稻村より一向。本尊復寺のままで

。別所村 清水郷村の西より

。法穂寺 別所村より西ふ東本願寺のままで

。下迫村 別所村の南東より日歸山一里许也

。法泉寺 下迫村より西ふ東本願寺の末流也

。觀音堂 因村也

。上迫村 下迫村の並ひより日歸山一里也

。真龍寺 上迫村より一向も東本願寺の末流也

。深山口村 上迫村の東也

。竜林寺 深山口村より深山

。下駒月村 深山口村より深山

。大論寺 下駒月村より深山

。上駒月村 下駒月村の東也

。佛曉寺 上駒月村より一向も東本願寺の末流也

